

2023年10月4日(水) 14:00-16:30 @シネマ・チュブキ・タバタ シアター 参加者：8名

テーマ ミニシアターから考える“新しい公民館”

ゲスト 竹中 翔子さん (映画と本とパンの店 シネコヤ 店主)

参加者へのメッセージ

“今回は、前回のサロンで出た「公民館」という言葉をヒントに、「ミニシアターから考える“新しい公民館”」について、みなさんとお話ししたいと思います。

今回のゲストである竹中さんが運営する藤沢のシネコヤでは、地元の福祉施設「さんわーく かぐや」を舞台にしたドキュメンタリー映画『かぐやびより』の上映を機に、地域の方々が、かぐやのメンバーと交流する場になったり、そこから新しい企画が生まれたり、シネコヤがハブとなり、地域をつなげる事例がたくさん生まれています。

シネコヤでの事例をインタビュー形式でお聞きしながら、社会の中での映画、あるいはそれを上映する場が担う役割について、みなさんと深掘りしたいと思います。”

 映画と本とパンの店 シネコヤ <https://cinekoya.com> 

 かぐやびより <https://tsumura-eiga.com> 

前回の参加者である、沖縄のミニシアター「シアタードーナツ」館主の宮島さんからシェアされた「公民館」という言葉を手掛かりに、今回のサロンを企画しました。

プレゼンターには神奈川県藤沢市で「映画と本とパンの店 シネコヤ」を運営する竹中翔子さんをお招きし、地元の福祉施設を舞台にした映画『かぐやびより』の上映がきっかけとなって、地域の交流が生まれた事例などをうかがいました。その後、質問や感想を共有しながら、ミニシアターの持つ「公民館」機能について深掘りしていきました。

参加者はレギュラーメンバーのほか、『かぐやびより』を監督した津村和比古さん、都内で週末のみの上映スペースを運営する方、TURN LAND 参加アーティストなどをお招きしました。

「映画+αの新しいスタイルの映画空間をつくる中で、自然発生的に地域のつながりが生まれた」という竹中さんの発表から、施設の側からの働きかけと地域の人たちから持ち込まれることの相互作用によって、映画館が居場所や出会いや学びの場になっている実践例が共有されました。参加者からは、「文化芸術の担い手であり、小規模なビジネスを営む身として、独自の組み合わせやつながりを強みにしながら、目指す社会を描く姿勢に共感を覚える」などのコメントがありました。

このレポートではその様子を抜粋、編集してお伝えします。

(構成・文：舟之川)

プロジェクト運営メンバー 平塚千穂子 (シネマ・チュブキ・タバタ代表) / 石井健介 (ブラインド・コミュニケーター)
舟之川聖子 (コーディネーター) / 吉川真以 (コーディネーター)

そこに集まる人たちの幸せや安心

石井：ではまず平塚さんから、今日竹中さんをお招きした経緯をお願いします。

平塚：まずこの TURN LAND の企画は、福祉施設をアーティストとコラボレーションして、福祉施設を地域にひらくということ、対象施設を選んで行っているのがメインの流れだと理解しています。チュプキはその中ではちょっと異質というか、福祉施設ではないし、アーティストや製作者の人たちとすでにコラボしているし、映画館として地域にもひらいているし、障害がある人もない人も来るし、ということで、文化施設が福祉のことをやっているという感じです。でも、そういうチュプキだからこそ面白いことが起きるのでは、ということで、今年度はプレ LAND というお試しの枠内で、「チュプキサロン」と題して、ゆるやかな対話の場を実施させてもらっています。

対話のテーマは、ここは映画館なので、上映する場でどんなことが起こるか、ユニバーサルとは、地域の中での映画館とは、などを考えてきた中で、シネコヤさんで、『かぐやびより』の上映をきっかけにより地域交流の場になったという実例があったので、それをお話していただけたらと思いました。他にも音楽ライブなど、独自で取り組まれていることも地域交流につながっていると思います。ちょうど前回のサロンで、映画館って映画を見せるだけではなくて、公民館的な、言ってみれば、そこに集まる人たちの幸せや安心や暮らしを潤す場としても機能しているんじゃないか、という話もしていたところで、もちろん障害者福祉に限らず、シネコヤさんでの取り組みをお聞かせいただけたらと思って、お声がけしました。

新しいスタイルの映画空間

石井：ではさっそく竹中さんに、シネコヤさんの成り立ちなどからうかがえますか。

竹中：今日はお招きいただき、ありがとうございます。シネコヤは2017年4月にオープンしました。ちょうどチュプキさんがオープンした半年後ぐらいです。平塚さんにはいろいろ相談にのってもらいました。お互い無事に7年目を迎えられましたね。

シネコヤは、神奈川県藤沢市の^{くげぬま}鵜沼海岸という小田急線の駅から歩いて3分という立地です。コンセプトは「映画と本とパンの店」で、1階がパン屋とブックカフェ、2階がシアターになっています。いわゆる普通にイメージされる映画館とはちょっと異なった、複合的なコミュニティ空間というイメージで運営しています。ブックカフェにはパンフレットや映画雑誌を含む約3,000冊の本があります。入ってパンが並んでいて、ゲートを入れて本棚があって、一見して映画館ばくないので、「何屋さんですか」とよく聞かれます。

石井：ブックカフェだけの利用もできるんですか。

竹中：はい、3時間500円とワンドリンクの注文で利用ができます。

石井：安いー！

平塚：映画を観ずにカフェだけ利用されるお客様はどのぐらいいらっしゃるんですか。

竹中：今はまだあまり多くないんですが、映画が満席で入れなかったときの受け皿には多少なっていて。せっかく来たから利用していただくか、映画を観るつもりはないけれど、どういう雰囲気なのか見てみたいという方もけっこういらっしゃいますね。ただ、平日の利用は少ないので、もう少し活用を考えたいなところではあります。2階のシアターのほうは22席で、いわゆる映画館の椅子ではなく、ソファや2人掛けの椅子など、それぞれ違うデザインになっています。サイドテーブルがあるので、下で買ったパンやコーヒーを飲食しながら映画が観られます。

平塚：もうこの空間自体が映画の世界みたいな、ヨーロッパの雰囲気のあるリビングでみんな映画を観るって感じなんですよ。空間の使い方もゆったりしていて。

竹中：全体のインテリアも、ノスタルジックでレトロな雰囲気にしています。ワインレッドなどの抑えた色味です。『ツイン・ピークス』の世界みたいってよく言われます。

平塚：確かに！

竹中：「映画館+α」な、新しいスタイルの映画空間を作っていきたいなと思ってまして、今この鵜沼海岸にある「シネコヤ」を一つのモデルケースにして、いろんなまちにシネコヤのようなお店ができていった

ら面白いなど。それぞれのまちに、それぞれの+αがくつついて、それぞれのシネコヤができていくことを目標にやっています。

石井：「ミニシアター」のような、ジャンルとしての「シネコヤ」という意味ですよ。

竹中：そうですね。シネコヤという名前が一人歩きしていったらいいなと思っています。

石井：飲食は普段のカフェのほかに、「シネ&フード」というイベントもされているとか。

竹中：はい、映画をイメージしたフードを近隣の飲食店とコラボして作ってもらって、そのフードを食べながら映画を観るという上映イベントも組んでいます。

会いに行きたくなる映画

石井：ではここで、津村監督にも出てきていただいて、お話をうかがいましょう。

津村：津村和比古といいます。『かぐやびより』を監督しました。普段はカメラマンをしています。

竹中：シネコヤで地域とのつながりが濃く出てきたきっかけになったのが、この映画になります。

津村：この作品は、藤沢市善行^{ぜんぎょう}にある「さんわーくかぐや」という福祉施設を舞台にしたドキュメンタリーです。主に精神障害と発達障害の方、定員10名の規模の小さな通所施設です。もともと当事者の家族が作った施設なので、本当に家族的なんですよ。僕が出会ったのは5、6年前です。きっとここは映画になると思って撮り始めて、丸4年かけて作った映画です。それを竹中さんに観ていただいて、やりましょうと言ってくださったんです。映画というのは、誰にどこで観てもらおうのかが一番難しいんですが、僕はやはり地元藤沢から始めたいと思っていました。

石井：竹中さんがシネコヤで上映しようと思った決め手は、どんなところだったんですか。

竹中：津村さんが、「これは普通に映画館で興行していくような作品ではないから、かぐやのある地で、こういう小さな場所で上映したいんだ」とおっしゃっていて、作り手がそういう考えであるということは、

小さなハコを持っている身としてはすごく勇気が湧くことで、津村さんの思いに共鳴しました。あと、わたしはもともとかぐやの代表の方とつながりがあって。シネコヤをやる前は、かぐやにもときどき遊びに行っていたんです。その代表の方から、かぐやが映画になるよと聞いて、「それはぜひ一緒になんかやりたいね」という話はして。完成後に津村さんをご紹介いただいて、観てみたら、作品自体も非常によくて。そのままのかぐやが描かれていて素敵だったので、上映したいなと思いました。

津村：わたしは本職はカメラマンで、監督は今回が初めてです。カメラマンは観察者。とにかく人を見ます。日常の細かい部分を見ていて、一人一人の人間をどう魅力的に浮かび上がらせるか。それを重ねて映画になった。だからテーマはないわけですね。この障害者施設にはこんな理想がありますよとか、ここは理想的な場所ですよとか、そういうことは一切考えなくて、とにかく自然のままの状況や人を撮りたいと思って作った映画でした。現場が本当に楽しかった。



左から竹中さん、津村さん、石井、平塚

平塚：チュプキでも1週間上映させていただきました。そういう撮り方だったからか、かぐやのメンバーに会いに行きたいなと思う感じで。映画をきっかけに施設がひらかれていく、こういうあり方もいいなと思いました。

石井：シネコヤで上映してみて、お客さんの反応はどうでしたか。

竹中：実際に会いに行く、施設を訪問する方もけっこういらっしゃるみたいです。地域清掃のときになどに、「映画見たよ」と声をかけられることもあったとかぐやの方から聞きました。映画を観たことで、近くの出来事だという体感がお客さんの中にも生まれたのかもしれない。

石井：いいなあ。

津村：地元では評判の良い施設なんですよね。基本的には農業とアートをやっている。緑いっぱいの庭が広がっていて、竹林があって鳥の声が聞こえる。住宅街とは思えない環境なんです。お客さんは、最初は福祉関係の方が多かったんですけど、観た方々の反応が良くて、そこから口コミで来場者が増えて、シネコヤで観た方が上映会を開催して下さったりして、僕もかぐやもシネコヤもみんながハッピーになったという状況です。

竹中：ゴールデンウィークということもあって、全国各地から来られていて、当初予定していた8日間が連日満席になって、その大反響を見て、地域の人やシネコヤの常連さんが来てくださって、7月ぐらいまで延長しました。コミュニティ系のメディアにも取り上げてもらったこともあって、「こんなところにこんな素敵なお店があったのね」と、かぐやの存在や取り組みを知っていただいたのかなど。そういう力のある作品だったんだなと思います。

津村：上映のときはできるだけメンバーにも来てもらって、上映後にみなさんと交流をするトークイベントもしたんですが、みんな本当に楽しかったって喜んでくれて、もう毎回行きたいという感じで（笑）。それはとても良かったですね、どんどんお互い壁がなくなる。

映画館を地域にひらく

津村：シネコヤさんは最近、かぐやのメンバーを受け入れてらっしゃるんですよね。

竹中：そうなんです。上映をきっかけにシネコヤとのつながりが強くできて、週に1回、2人の方にお掃除や飲食の仕込み系でお手伝いに来てもらっています。

平塚：それがもう素晴らしい。

津村：ねえ、素晴らしいですよ。

竹中：テーブルを拭いたり、モップをかけたり。パソコンができる子にはスケジュール表を作ってもらったり、紅茶をバックする軽量をやったり、みなさんが得意とすることで関わってもらっています。

津村：その中の一人は、小学校からずっと不登校だったんですが、とにかく絵を描くことや、物を作ることが好きな子で。竹中さんに声をかけてもらって、本人はすごく嬉しいみたいですね。任せてもらえるということが。

竹中：そうはいつでも、作業所でやっていることとあまり変わらないんじゃないかって、当初話をしたんですけど、かぐやの方が、「福祉施設の中でやる作業と、お店に行きやる作業は全然意味が違うんです」とおっしゃっていて。かぐやが目指しているのは、「かぐやのメンバーが個人として地域とつながって暮らしていけるようにしたい」とも聞いたので、そういう観点を持って、作業内容やご本人のやりたいことを探りながらやっています。

平塚：チュプキではなかなか田端のまちに密着した関係性はつくれていないんですが、ひとつ、工房集さんという、川口市にある福祉施設とのつながりがあります。毎月の上映案内のチラシの表に工房集のアーティストさんの作品を選んで、それにデザイン料をお支払いしたり、作品がグッズになったものをロビーで販売させていただいたりしています。やっぱり社会とのつながりができるというのが、当人にとってもよいみたいだし、親御さんもすごく喜んでらっしゃいますね。自分の子が描いた作品が、ああやってみんなの手に渡るってことがすごく誇らしいと。

石井：シネコヤには、近所のおじさんも手伝いに来られてるんですよね。その話もぜひ。

竹中：かぐやのメンバーをスムーズに受け入れられたのには、経緯があります。シネコヤの近所に、肢体障害と言語障害のあるおじさんがいて、歩けるけれども左半身が動かないという方で。ある日いきなり、「映画が好きだからシネコヤで働きたい」と来られて。よくよく話を聞いたら、「近所にすごくいいなと思うお店があって、映画も好きだから、こういうところで時間を過ごしたい」というようなニュアンスだったことがわかって。そこで、「お給料を払うのは難しいけれど、手伝っていただく代わりに映画は招待券でいつでも観に来ていいという条件でいかがですか」とお話ししたら、すごく喜んでくださって、週1でお手伝いに来てもらっていたんですが、コロナ下はストップしていて。その話を上映のときにかぐやの方にしたら、「その方にとっては、近所に居場所があるということだから、絶対再開したほうがいい」と言われて。わたしとしては、地域福祉を意識していたわけでは全然な

いんですが、そういうことにつながることをやっていただくと教えてもらって。そのタイミングでおじさんも再開し、かぐやのメンバーも受け入れ、という感じで今一緒にやっています。

平塚：すごく素敵ですよねぇ。

拡がるシネコヤ

石井：シネコヤが自然な流れの中で地域とつながりをつくってきたと感じました。では最後に、これから10年、15年と、長く地域で映画館+αなシネコヤでこんなことをしたいなとか、何か描いていることはありますか。

竹中：今、地域の幼稚園やインターナショナルスクール向けに貸切上映をしたり、子どもたちが映画を作るワークショップも年に1回やっています。子どもたちが物語を作って、撮影する。最後に家族を呼んで上映会をして、舞台挨拶をして……というプログラムを1日でやる。それは地域のNPOと連携していて。他にも自閉症のお子さんを持つミュージシャンの講演会をしたりと、つながりの中から少しずつシアターの活用を始めているところです。

平塚：素晴らしい～。

竹中：もともとわたしはNPOの支援センターで働いていたという経歴もあって、地域活動がわりと身近で、市内にどういう団体があるかも知っていたので、団体から話がきたときでも、こちらからなにかやりたいと思ったときでも、わりとハードルなく進められています。コラボ企画をいろいろやってみて、シアターという設備をどう地域に活用していくかというときに、映画という軸はありつつも、外からのアイデアで「こういう活用をしたい」という提案があれば、積極的に開放していく必要があるのかなと思っています。その部分が今日のテーマである「新しい公民館」にもつながっていくのかなと思います。

「映画館がコミュニティを作っている」というストーリーが求められることがけっこうあると感じているんですが、わたし自身はあまりそういう意識は持っていません。「コミュニティを作ろう」というよりも、この場所をハブにした自然発生的なコミュニティの醸成をしていきたいと思っています。その仕掛けとしてのイベントや、別に映画を観なくてもパンだけ買いに来

るとか、本が好きで本を読みに来るとい人もいて、そこに集まってこられるような場づくりと仕掛けが必要である、ということをお伝えしておきたいなと思います。自然発生的なコミュニティによって、それぞれのまちで必要とされる映画空間のあり方が変わってくる、ということが面白いのでは、と考えています。



質問に答える竹中さん

コミュニティが自然発生する仕掛け

石井：竹中さん、津村さん、ありがとうございました。ではみなさんから感想や質問など、ざっくばらんに話していきましょう。

宮島：シアタードーナツの宮島です。ずっとうなずきながら聞いていました。お客さんとの交流を意図的にやっていかないとお客さんが増えない、シアターは儲からないというシビアなところがあるので、自然発生的なところももちろんありながら、僕はコミュニティに何か刺激を与えられるような企画を日々考えています。地域の人たちと映画を接点にしてどうつながっていくのか。これは今の時代、ミニシアターの生命線だと思います。福祉、医療、文化、教育。近くに学校や大学があったら、コラボ企画もとても効果的です。映画のテーマを通して、お互いにハッピーな関係をつくる。キーマン同士をつなげる。そこで来てくれた人たちが、「こんな映画の楽しみ方があるんだ」という体験をしてくれるように。

食べ物も重要ですよ。シネコヤさんはパンで、うちはドーナツ。映画館だけがメインだと、お客さんが敷居高く感じてしまうので、カフェのサロンのなモードも、これからのミニシアターは必須だと思うし、「いつでもいらっしやい」というモードから、地域でのつ

ながりは楽しくなっていく。「みんなの映画館」のイメージが大切かなと思っています。



オンラインで参加する宮島さん

参加者 a: 竹中さんに質問なのですが、「映画館がコミュニティを作っているというストーリーを求められがち」というお話が先ほどありましたが、どういうことなのか、もう少し補足していただけますか。

竹中: 特に地方のミニシアターに対して、「地域コミュニティの拠点という役割を担っていますよね」とか、「すごくそこに意識を置いて運営されていますよね」という取り上げられ方をすることが非常に多いなと思っていて。確かに、そういう視点で運営しているミニシアターが少なからずあると思いますし、そういう要素があるからこそ、地方でのミニシアターの存在意義がある部分もあると思うんですけども、シネコヤとしてはそこに主眼を置いているわけではない、という意味でした。シネコヤは、各地域に映画+αで映画文化を残していくことを目標にやっています。いわゆる映画館業だけの映画館とはちょっと違うスタイルであることによって、複合的な地域交流の場になっているのだと思います。

参加者 a: 宮島さんがコミュニティを作る、場を作るということについても伺いたいです。

宮島: 僕はそもそも、まちのために映画館を作ろうと思ったことはないんです。僕は映画が好きだし、沖縄の映画もいっぱい作られているし、作家さんを応援したいし、映画を観る人を増やしたいという思いで始めたんです。あと、僕がやっているのは「コミュニティを作る」のではなくて、もともとあるコミュニティに情報を持って行ってあげることです。たとえば、PTAの方々がインクルーシブ教育ってなんだということを知ったり、考えたりするために、ドキュメンタリー映

画の『みんなの学校』を紹介したら喜ばれるんじゃないかな、とか。そこに観に来てくれたお客さん同士で、また新たなコミュニティが自然発生的に作られるかもしれない。その人たちが、今度は自分たちの新しい仲間と一緒に、シアターレンタルを使って企画してくれとか。そういう動線になっていく感じです。

石井: それって普段から地域コミュニティにアンテナを張っていないとできないことですよね。

平塚: それと、人が集まってくるのは、宮島さんにただただ映画を観てほしい、映画館に来てほしい、という思いがあるからなんですよね。こちら側に何か操作してやろうという意図が見えちゃうと、こういうことってなかなかうまくいかないんだけど。

宮島: うん、だからパスは軽〜く出しますよ。重くしない。みんなの余暇の時間に映画を観るっていうライフスタイルを自然に刷り込みたいから。

平塚: 竹中さんにしろ、宮島さんにしろ、哲学がちゃんあるから、ぶれずにやっているんだろうなあ。

竹中: それは平塚さんにこそ感じますけどね！

平塚: いやあ、最近チュプキは迷走していて（笑）。

石井: じゃあ次回のサロンのテーマはそれで（笑）！

地域から上映館が生まれる

平塚: ここで、もんなか がっちゃん's シアターさんをみなさんにご紹介します。

山崎: 山崎竜二と申します。僕は江東区の門前仲町で、今年の8月から12月までの期間限定で、「もんなか がっちゃん's シアター」という映画上映の場を始めました。動機はけっこう不純なところが多くて…みなさんの意識の高さから比べると、本当にもうお恥ずかしい限りなんですけど……。

僕は本業で広告制作の会社を経営しております。社屋に撮影用の白ホリゾン（全面が白い空間）のスタジオがあって、普段は企業さんの依頼で商品やモデルさんの撮影をしています。社屋にはカフェも併設していて、週末に僕がカフェの店長さんをやり始めたんです。ちょうどコロナ禍で、地域の人たちと仲良くなり

たいなーと思っていたときで。そうしたら、こんなに広いスペースが休日は空いていることに気づいた。もったいなすぎる、なにか有効活用しないといけないと思いました。でも、すぐに映画館をやろうとなつたわけではなくて。

それとは別で、江東区で地域の共生社会を作ろうというNPOに、ちょっと縁があって入っちゃったんです。誘われたから、なんかわかんないけどまあいいやみたいな感じで。でも、入ってみたら、僕は福祉のことも、障害のことも、共生社会のことも何もわからなくて、メンバーの方たちから教わることが多くて。でも、だんだん意識が芽生えてきたときに、これは僕だけがわかっていないから、勉強しないと、なにかやらないとまずいぞと思うようになって。そんな中、本当にたまたまだったんですけど、チュプキのことを知ったんです。区の講演のチラシだったと思います。スタジオを有効活用したいと考えていたときだったから、「ユニバーサルシアター」という言葉を聞いてすぐ、もう直感で、僕ができることはこれしかない！と、何も知らないままチュプキさんに伺って。そしてこれも狙ったわけじゃなかったんですけども、たまたま『こころの通訳者たち』を観てしまって。

石井：観てしまって（笑）。

山崎：はい、そしてやっぱり衝撃を受けてしまって。平塚さんに「ユニバーサルシアターを門前仲町でやりたい」と相談をさせていただいて。それが今年の3月で、そこから8月のオープンに向けて、もう勢いだけできちゃって。（<https://x.gd/bZuRh>）見ての通り、ちゃんとした映画館では全然なくて、スタジオに芝生風のカーペットを敷いて、椅子を置いて、プロジェクターで映しているだけなので、これが映画館かと言われると、ちょっとお恥ずかしいんですけど。

平塚：いや、その「映画館じゃないからこそできること」をぜひ誇りに思ってやっていただきたいです。がっちゃん'sさんでは毎週日曜日、1日3本の上映をしています。朝の回はドキュメンタリーや日本映画、昼の回が親子で観られる作品。昼は椅子も全部取っ払った芝生の上を子どもたちが駆け回ったり、ゴロゴロしながら観られるようになっています。地域の人たちも、「こんなに開放的で、安心して子どもと一緒に観られる映画館ないねー」なんて喜んでらっしゃいました。夜は、新人監督の育成枠として、インディーズの作品。興行場法の縛りもなく、自由なラインナップが組めて、経営基盤は広告会社の方でしっかりあって、

うらやましいです。期間限定ではありますが、月に4日間だけのユニバーサルシアターができたということで、ぜひ今日ご紹介したいなと思いました。

山崎：ノウハウもないし、映画館をやりたいとも思っ
てなかったの。どちらかという、すべてがたまたまのタイミングで……。

石井：竹中さんとも、宮島さんとも、平塚さんと違う切り口から、「映画だ！」となっていくのは面白いですね。

コミュニティ、文化の拠点としての映画館

石井：今日どうでしたか。みなさんからもしもと言わずお願いします。

参加者 b：「求められることができる場所」としての上映館なんだろうなあという気がしました。いろんなことを複合させる、そうじゃないともうやっていかれない。そういう方向に世の中が向かっているように思っています。

参加者 c：僕はフリーのライターなんですけど、出版業界や書店さんなど、規模がどんどん小さくなっていく業界にいる人たちは、やっぱり同じような問題意識を持っている。書店も今までみたいに本だけ売っていても立ち行かない。カフェと組み合わせるとか、自分たちがメディアとなって、自分たちのセレクトを見せて、自分たちは社会をこうしていきたいというメッセージを持ってやってらっしゃる。だから僕は他人事や他業種の話ではなく、今日のお話をシンパシーを持って聞いていました。

参加者 d：去年、アメリカで障害とアートのリサーチをしていたんですが、アメリカには、「こういう社会を作っていきたい」という同じマインドを持った人たちが、いざイベントするとなるとガッと集まる文化がある。思想としてのコミュニティというか。都市部は家賃が高くて、集まる場所が持ちにくいということもあるんですが、他方、日本では、所属や場所に紐づいてコミュニティというものが考えられているという違いがある。いろんな選択肢に、いろんな人が集まる機会が積み重なってって、それを日本ではコミュニティと呼ぶのかなあと考えていました。ここ田端は、東

京然とした東京とはちょっと離れていることが、コミュニティを作りやすい背景としてあるのでしょうか。

(終)

(構成・文：舟之川聖子)

参加者 a：映画館で人が集まって話すらしいという、すごく曖昧なまま来たんですが、すごく面白かったです。かぐやの映画の話も、なんだか映画のワンシーンを見たようなイメージが湧きました。オンライン会議をこんないい音で聞いたことなかったし（笑）。

参加者 e：わたしは10年ぐらい、インドネシアに住んでいたんですが、近くにフランスの文化機関の建物があって、展示や映画やライブをやれる場所と、美味しいスイーツを出すお店もあって、常に人が溜まっていた。なにかしらイベントをやっていて、手持ち無沙汰になるとよくそこに寄っていました。「食べ物目当てで来たけど、展覧会やってるからちょっと見てみようかな」とか、そういう場所が日本が増えていくと、文化的に豊かになるんじゃないかな。

参加者 f：視覚障害の観点からは、場所に集うというのは、どこかに移動するというので、ハードルにはなる。場所を覚えていないと来られない。その点、チュプキさんは視覚障害の友達で行っている人が多いし、道案内もネット上にいろいろ出ている。その場所までとりあえず行けるという安心感が重要かも。あと、映画ってちょっと遠くのものをしている感じがあるから、いろんな+αが受け入れやすいのかもしれないです。飲食にしても、たとえば生の演劇で、目の前で人がパフォーマンスしているときになかなか食べて難しい。でも、演劇の自由な鑑賞方法の手がかりが、映画にあるかもしれない、とも思いました。

石井：確かに、場所にアクセスできるっていうのは、僕ら視覚障害者にとっては、めちゃくちゃ初歩の初歩のアクセシビリティですね。

平塚：確かに、渋谷や新宿に繰り出す恐怖が田端にはない（笑）。山手線で一番肩の力を抜いて来られるかも。そういう意味では、障害者の拠点になりうる好立地だったんですね。

石井：時間になりましたので、今日はここまでで。みなさん、今回もご参加ありがとうございました。また次回のサロンでお会いしましょう！



事務局やアーツ、都庁の関係者も対話に参加する



恒例の交流タイム